

## 唐後半期における陰山と天徳軍

— 敦煌発現「駉程記断簡」(羽〇三三二) 文書の検討を通じて —

齊藤 茂雄

はじめに

近年、中国を中心とする東アジア農耕地域に居城する定住民と、その北方、内陸アジアの乾燥ステップ地域に居住する遊牧民との連関が強調されるようになってきている。たとえば、農耕世界と遊牧世界の中間に両者が混在する境界地帯が存在し、その地域が両者の歴史展開に大きな影響を与えているとする、「農牧接壤地帯論」<sup>①</sup>などはその一例である。とりわけ、唐王朝の形成・拡大に内陸アジア遊牧民が果たした役割の重要性は、石見清裕氏によって既に指摘されている通りである。<sup>②</sup>

中国定住農耕民と内陸アジア遊牧民が接触を持つ地域のひとつとして、陰山山脈がある。陰山山脈は黄河屈曲部の北方に位置し、中華人民共和国内蒙古自治区に属している。この山はゴビの北方の漠北<sup>③</sup>から一続きの草原地帯である、高度一四〇〇〜一五〇〇m

のなだらかな陰山北麓丘陵地帯と、そこから五〇〇mほども下り降り植生も変化する南麓地帯とを隔てる、いわば「崖」のような山であるという「森安(編)二〇一一、四八五、六二九―六三〇頁」。

この山脈の北麓は歴代遊牧民にとって重要な根拠地であった「吉田一九八〇/鈴木二〇一三、八五―九一頁」。特に安史の乱以前の唐前半期には、トルコ系遊牧国家である突厥可汗国(第一可汗国Ⅱ五五二―六三〇年/第二可汗国Ⅱ六八二―七四五年)の重要な根拠地が置かれていた「鈴木二〇一一」。一方、南麓には、六三〇(貞観四)年の突厥第一可汗国の崩壊によって唐に帰順した突厥遺民を統御するために、单于都護府が置かれた。さらに、突厥第二可汗国が建国されて突厥が唐の支配を離れると、七〇八(景龍二)年に唐が三受降城を建設して突厥の侵攻への守りとした。陰山山脈はその崖状の構造と高度差から、北麓と南麓とを行き来

する通行路が限定されるため、通行路に軍事拠点を設置することで、遊牧民の侵入を防ぐことが比較的にたやすいからである。陰山山脈を障壁として、突厥と唐が近距離でにらみ合う状況が続いた。

ところが、史念海氏が指摘するように、七四五年に突厥が滅亡し、代わりにウイグル可汗国（七四五～八四〇年）が建国されると、唐の辺防体制は、北方のウイグル対策ではなく、チベット高原で勢力を拡大した西方の吐蕃対策に主眼が置かれることとなる〔史念海 一九八五、三二―三五頁〕。吐蕃とのあいだには和平が長続きせず、西方国境地帯には常に吐蕃の侵攻に対する緊張感があつた一方、北方のウイグルとのあいだには、ウイグル優位の友好関係が一貫して構築されていたからである。

それでは、後半期の唐にとって陰山南麓は重要性を失つたのだろうか。確かに吐蕃国境ほどの軍事的緊張状態を陰山方面に見取することはできない。しかし、それでも東部陰山（大青山）方面には振武節度使（振武軍）が、西部陰山（狼山）方面には天德軍都防禦使（天德軍）が設置されて、ウイグルへの防備と陰山山中に住まう遊牧民の統御を続けており、唐はこれらの軍事拠点に供給するため様々な方法で糧食確保に奔走し、しばしば政治問題になるほどだった〔丸橋 二〇〇六、一五一―四八頁〕。史念海氏の概観は大筋では正しいとはいえ、陰山方面の重要性が失われたわけではないのである。唐後半期の陰山山脈周辺地域の持つ重要性は、

改めて見直す必要がある。

とはいえ、陰山は南の唐からも北のウイグルからも「辺境」であるため、既存の史料中にある情報数は決して多くなく、具体的な状況がわかりにくいという弱みがあった。そのような中、武田科学財団杏雨書屋が所蔵する未公刊の敦煌文書の写真図版集、『敦煌秘笈』の刊行が二〇〇九年からはじまった。その第一巻〔二二八―二二九頁〕に、「駭程記断簡」（羽〇三二）と通称される文書があつた。<sup>5)</sup>

本文書は、ある旅行者の某年八月十六日から九月十八日までの宿泊地が、日にちごとに記録されている簡潔なものである。残念ながら前後が欠落しているが、それでもその宿泊地の地名は注目に値する。それらの地名の多くは、陰山山脈南麓の地名として漢籍中に現れるものであり、この文書が陰山山脈周辺の交通路を記録したものであることを示しているからである。

本文書については、高田時雄氏が研究に先鞭を付けて録文を作成したほか〔高田 一九九三、一二四―一二五頁〕、写真公刊後には、登場する地名の比定や、本文書の旅行者は敦煌オアシス（沙州）からの公的使節団であること、その目的地の一つは五臺山であつて、本文書は一種の五臺山巡礼記の性格を持つていることを指摘している〔高田 二〇一一〕。

高田氏の研究は参考にすべき点が多いが、それでも積み残された問題がある。たとえば、本文書の作成年代の問題である。本文

書には紀年がないが、歴史的状況を考察することで年代のおおまかな比定をすることが可能である。また、高田氏は本文書の地名比定を行っているものの、漢籍史料の記述のみを判断材料としており、現地で行われてきた考古学的調査の成果を利用していない。本文書に現れている地名のいくつかは、既に遺跡が発見されて場所が確定しているのであり、それを利用することで本文書の使節団が通った道のある程度正確に復元することができる。そして、本文書の記述を手がかりにして、陰山南麓の具体像を復元することが本稿の大きな目的となる。

そこで本稿では、まず第一章で、改めて本文書に登場する地名を考古学的調査の成果と合わせて比定する。続いて第二章で本文書の作成年代を検討し、第三章では本文書より得られる情報を手掛かりに、唐後半期の陰山脈周辺の実態を、交通路の状況と天徳軍の機能という二つの切り口から検討する。なお、筆者は実際に本文書の路程に近いルートを通して、陰山脈周辺を調査したことがあり「鈴木・齊藤二〇一〇、二五―二九頁」、その際の知見を交えて論じたい。

## 一．文献学的検討

### 録文

1. 「  
(十六日)  
 發至谷南口宿。十七日、

2. 發至「」宿。十日發至西受降城宿。十九日、西城

歇。

3. 廿日、發至四曲堡下宿。廿一日、發至具懷堡宿。廿三日、發

4. 至天徳軍城南館宿。廿四日、天徳打毬、設沙州專使。至九

5. 月三日、發天徳、發至麦泊食宿。四日、發至曲河宿。五日、

發

6. 至中受降城宿。六日、發至神山関宿。七日、雲迦関宿。八日、歇。

7. 九日、發至長平驛宿。十日、發至寧人驛宿。十一日、發子

8. 河驛宿。十二日、發至振武宿。十三日、發長慶驛宿。

9. 十四日、發至靜邊軍宿。十五日、紇藥驛宿。十六日、平番

驛

10. 宿。十七日、天寧驛宿。十八日、鴈門関北口驛宿。十九日、

(後欠)

### 移動経路

(前欠、陰山越え) ↓ 八／一六 谷南口 ↓ 八／一七 不明 ↓

八／一八 八／一九 西受降城 ↓ 八／二〇 四曲堡 ↓ 八／二

一 具懷堡 ↓ 八／二三 (二三?) ↓ 九／二 天徳軍 ↓ 九／三

麦泊 ↓ 九／四 曲河 ↓ 九／五 中受降城 ↓ 九／六 神山関

↓九／七く九／八 雲迦闕 ↓九／九 長平駅 ↓九／一〇 寧  
 人駅 ↓九／一一 子河駅 ↓九／一二 振武(軍) ↓九／一  
 三 長慶駅 ↓九／一四 静辺軍 ↓九／一五 紇葉駅 ↓九／  
 一六 平番駅 ↓九／一七 天寧駅 ↓九／一八 雁門闕北口駅  
 ↓九／一九 不明 ↓(後欠)

## 語注

西受降城……唐の三受降城のひとつ。三受降城とは、当時の朔方  
 軍大総管であった張仁愿が、七〇八(景龍二)年に突厥の陰山  
 以南への進入を防ぐために設置した防御拠点であり、東受降城・  
 中受降城・西受降城からなる。唐は中受降城を基点として、東  
 西四百里の地点に東西受降城を建設した『旧唐書』卷九三「張  
 仁愿伝」(二九八二頁)。なお、三受降城の設置年は、史料によ  
 って七〇七(神龍三)年から七一一年(景雲二)年まで幅がある  
 が、先行研究では他史料の記述や、唐と突厥との政治情勢の分  
 析から、一致して七〇八(景龍二)年に紀年付けているため「岑  
 仲勉 一九五八、三六五頁／護 一九六七、一九四―一九五頁／  
 内藤 一九八八、三五七―三五八頁／王亜勇 一九八八／李鴻  
 賓 一九九五、一一三―一四頁」、筆者もこれに従う。

また、『元和郡県図志』卷四「西受降城」(一一六頁)による  
 と、七二二(開元十)年に黄河の浸食によって破損したため移  
 置したといい、それ以後に移置の情報はない。それゆえ、本文

書に現れる西受降城は移置後のものとみられる。その所在地に  
 ついては、嚴耕望氏は北緯四一度一五分、東経一〇七度二五  
 三〇分付近、現在の狼山県北の狼山口の南方あるいは東南方と  
 推測する〔嚴耕望 一九八五A、二二四、二二二、二三一、二四  
 六／嚴耕望 一九八五B、六二三頁／嚴耕望 一九八六、一三三  
 八、一三五七頁〕。ただし、嚴氏は初置西受降城と移置西受降城  
 を区別していない。一方、王北辰氏は、初置西受降城を臨河市  
 (現・巴彦淖爾市)西南の黄羊木頭城址に、移置西受降城の位置  
 を、臨河市東北の八・一城址に比定している〔王北辰 一九八  
 九、三六二―三六六頁／cf.『文物地図』、二六六―二六七頁〕も  
 のの、唐代の黄河河道が現在よりも北方にあったこと(現在の  
 烏加河)を考慮しておらず、現在の河道を基準にして位置を比  
 定しているため従えない。一方、趙占魁氏は、移置前の西受降  
 城を臨河市西北の古城郷古城に、移置後の西受降城を烏拉特中  
 旗烏加河郷にある烏加河古城(奮斗古城)に比定し〔趙占魁 一  
 九九三、六一―六四頁〕、李逸友〔一九九三、七三頁〕や張虎  
 〔二〇一一、八四頁〕も意見を同じくしている。趙氏の説は本文  
 書の里程と矛盾しないため、筆者も烏加河古城説に従う。

なお、高田氏は西受降城の次に宿泊した「西城」を西受降城  
 と別地点であると見なしているが〔高田 二〇一一、九頁〕、西  
 受降城を指して「西城」と呼ぶ例は多い。たとえば、以下の史  
 料には、次のようにある。

『通典』卷一七二「州郡二序目下 朔方節度使」(四四八〇頁)

西城 九原郡の北黄河の外八十里、景龍中に韓公の張仁愿置く。<sup>6)</sup>

ここでは、明らかに西受降城のことを指して西城と呼んでいる。さらに、本文書における「歇(やすむ)」字は、六行目の雲伽閣の例をみてもわかるように連泊する際に使用されている。よって、ここでは「西城」を「西受降城」の略称とみなし、西受降城で二泊したものと考えたい。

天徳軍城……天徳軍はもとも朔方軍の鎮守軍であったが、七九六(貞元十二)年九月に天徳軍を独立させ、李景略を豊州刺史・天徳軍豊州西受降城都防禦使とした(『旧唐書』卷一三「徳宗紀下」(二八四頁) / 『資治通鑑』卷三三五「徳宗貞元十二年条」(七五七四―七五七五頁))。その所在地と沿革については、『元和郡県図志』卷四「天徳軍城」(一一三―一四頁)の記述によると次のようである。当初は、七五五(天宝十四)年に建設された大同川の大安軍を改称して天徳軍とした。その後、安史の乱で城が焼かれたため、旧城から約三里の距離にあった永清柵に兵馬を移し天徳軍と名乗ったが、そのオフィスは西受降城に置くという変則的な形態を取った。ところが、八二三(元和八年)の春に西受降城の南面が黄河の氾濫によって削られたため、宰相であった李吉甫は西受降城を修築するよりも旧天徳軍城を

再利用した方が財政支出が少ないとして、大同川に天徳軍を復置し、西受降城は子城に兵一千人を残して放棄した。本文書では西受降城と天徳軍城が別に現れている点から、大同川の天徳軍城に当たるとは間違いない。この大同川の天徳軍城は、巴彥淖爾市烏拉特前旗額爾登宝拉格蘇木陳二壕村から、天徳軍城の南五里に葬られたとされる「王逆修墓誌」が発見されたことより、一九三三年の洪水で烏梁素海に水没した「土城子」と呼ばれる城郭跡に当たることが確定している(張郁 一九八一 / 張郁 一九九七)。なお、「南館」という表現は、トゥルファン文書のいわゆる「北館文書」<sup>7)</sup>に現れる「北館」を想起させる。「北館」がトゥルファン城内にあったこと(孫曉林 一九九一、二五二頁)から考えれば、「天徳軍城南館」もまた、天徳軍城内にあったと考えられよう。「館」については第三章で詳述する。天徳打毬、設沙州專使……次章以下で詳述する。麦泊……この地名は、『元和郡県図志』卷四「関内道四 天徳軍条」(二一四頁)に所収された李吉甫の上奏文中に、次のようにある。

其の城(＝天徳軍城)は大同川の中に居り、北戎の大路に當たり、南のかた牟那山鉗耳髻に接し、山中に好き材木を出せば、若し營建する有れば、日ならずして成るべし。牟那山の南は又た是れ麥泊なり、其の地は良沃にして、遠近は殊なら

ず。<sup>8)</sup>

天徳軍の場所は上述したように確定しているので、天徳軍がある大同川とは、西部陰山である狼山脈と東部陰山である大青山脈の間にある明安川であることは間違いない。その南にある牟那山とは、大青山脈の西半分に当たる烏拉山に当たると

麦泊はその牟那山の南にあったという。おそらく、黄河と陰山の間にある湖だったのだろう。さらに、現在の烏拉山はかなり険しく、当時の旅行者もあえて山越えをするとは思えない。「cf. 鈴木・齊藤 二〇一〇、二二八―二九頁」。おそらく、この旅行者も烏拉山の西端をかわして麦泊に到達したのだろう。つまり、本文書を残した旅行者は、天徳軍からさらに南下して黄河沿いに牟那山の西側をすりぬけ、麦泊で宿営したものと思われる。ここからは陰山南麓を東に向けて進行したのである。中受降城……二受降城の内のひとつ。中受降城の建置については次のようにある。

『通典』卷一九八「边防十四 突厥中」(五四三―三八頁)

是れより先、朔方軍は北のかた突厥と河を以て界と爲す。河の北岸に拂雲祠有り、突厥の將に入寇せんとするに、必ず先づ祠に詣り祭酹求福し、因りて馬を牧<sup>か</sup>ひ兵を料り、冰の合するを候ちて渡河す。時に默啜(『突厥第二可汗国、第二代カ

プガン可汗)は衆を盡くして西のかた姿葛を撃てば、仁愿は虚に乗じて漠南の地を奪取し、三城を築き、首尾は相い應じ、其の南寇の路を絶つ。年滿の兵を留め其の功を成すを助けしむ。拂雲祠を以て中城と爲し、東西と相い去ること各おの四百里、皆な津濟に據り、遙かに相い應接す。<sup>9)</sup>

この記述より、中受降城は突厥の侵入路上にあたる渡河地点に建設されたことがわかる。唐代遊牧民が陰山脈を越えて侵入する経路として最も重要な地点は、現在の包頭北方の昆都侖河谷にあたる「呼延谷」であり「嚴耕望 一九八五B、六〇八―六一〇頁」、それゆえ、中受降城の跡地は、そのほぼ真南にあたる包頭南郊の敖陶罈子古城に比定されている[張郁 一九九一/劉幻真 一九九四]。この説には懐疑的な意見もある[陳凌 二〇一三、六七―六八頁]ものの、他に有力な遺跡もなく、地理的條件はむしろ合致しているため従いたい。

雲伽関……「雲伽関」のこと。『冊府元龜』卷四一〇「將帥部城壘」(明版、四八七―六頁)には、次のようにある。

李泳は振武軍節度使たり。太和四(八三〇)年七月に上言すらく、「先に管内にて雲伽関を修し、功を畢う。並びに畫圖一軸を進む」と。又た奏すらく「兵馬一千人を差わし、雲伽関おもむに赴きて守らしむ」と。<sup>10)</sup>

ここから、雲伽関は八三〇年に建造あるいは修築されたことがわかる。『新唐書』卷三七「地理志一 单于大都護府金河渠条」（九七六頁）には、「金河。中。天寶四年に置く。本と後魏の道武の都とする所なり。雲伽関有り、後に廢すも、太和四（八三〇）年に復置す」とあることからすると、修繕だった可能性が高いだろう。とはいえ、復置以前の雲伽関については何の情報もなく、実際に運用されていたかどうか全く不明である。

嚴耕望「一九八五A、六一〇頁」は、雲伽関が呼延谷に当たるとする説を紹介するものの、嚴耕望自身は呼延谷の近くであるとすることで詳しく述べていない。しかし、雲伽関が呼延谷に当たらないことは、本文書で呼延谷の降り口に建設された中受降城より二日の里程とされていることから明らかである。この雲伽関は『新唐書』卷一七一「劉沔伝」（五一九四頁）に次の記述がある。

武宗立つるに、檢校尚書左僕射に遷る。回鶻ウイグル天徳を寇せば、詔して兵を以て雲伽関に據らしめれば、虜は引去す。<sup>12</sup>

この記述によれば、会昌元（八四〇）年に武宗が即位した直後、実際に北方からのウイグルの侵攻を防御するために運用されており、防御に都合がよい交通の要衝に設置されたものと考えられる。それゆえ、嚴耕望氏は陰山越えの主要ルート上にある呼

延谷付近と想定したのである。本文書の里程に当たると陰山南麓で最もありうる地点として、黄河が北側に張り出して陰山に接近している場所がある。現代においても包頭東方約二〇kmにある東富付近において、黄河が北側に屈曲していて黄河と陰山の間距離が数kmしかない地点がある。黄河の河道は時代によって変わりうるため現代と地点は異なるだろうが、黄河と陰山の距離が最も接近した場所に関を設置し、兵を駐屯させたと考えられる。

振武……「振武軍」のこと。唐代の振武軍は、次のようにある。

『元和郡県図志』卷四「関内道四 单于大都護府金河渠条」（一〇八頁）

天寶四（七四五）年に置く。初め、景龍二（七〇八）年、張仁愿は今の東受降城に振武軍を置く。天寶四年に、節度使の王忠嗣は此の城内（＝復置单于都護府城）に移す。<sup>13</sup>

このように、振武軍は七四五年以降は復置单于都護府城に設置された。单于都護府城は、六六三（龍朔三）年に燕然都護府を漠北の瀚海都護府と漠南の单于都護府に分置した際に、現在の托克托付近に設置されたと考えられる「齊藤 二〇〇九、二三―二四、三三頁」。しかし、单于都護府は復興した突厥第二可汗国の侵攻によって六八三（弘道元）年に陥落し、七二〇（開元八）

年に復置されるまで同地域は唐の統制下から離れることとなった〔齊藤二〇〇九、二四―二五頁〕。復置单于都護府城の位置は、八一九（元和九）年作成で、振武軍の東南四里に葬られたと記述がある「劉如元墓誌」の発見から、呼和浩特市和林格爾県土城子遺跡に当たることが明らかとなっている〔齊藤二〇〇九、二九―三〇頁〕。

静邊軍……『元和郡県図志』卷四「関内道四单于大都護府条」（一〇八頁）の「八到」に「東南のかた河界の静邊軍に至ること一百二十里<sup>14</sup>」とある。

天寧驛……天寧駅と関係すると思われる地名に、天寧軍がある。この地名については、次の記事がある。

『読史方輿紀要』卷四〇「山西二太原府代州神武軍条」（一八五一頁）

神武軍城は、州の北に在り。「唐志」に、「代州に守捉の兵有り。其の北に大同軍有り。本と大武軍、調露二（六八〇）年に神武軍と曰い、天授二（六九二）年に平狄軍と曰い、大足元（七〇一）年に復た名を更む。其の西に天安軍有り、天寶十二（七五三）載に置く。亦た天寧軍と曰う」と。<sup>15</sup>

この記述によれば、「唐志」、すなわち『新唐書』『地理志』に、天寧軍は代州北の大同軍の西にあった天安軍が改称されたもの

であり、代州の北西にあったと記述されていることになる。ところが、現行本の『新唐書』卷三九「地理志三 代州雁門郡条」（一〇〇六頁）をみると、文が「天寶十二載置」で終わっていて「亦曰天寧軍」の記述はなく、『読史方輿紀要』がどの版本からこの情報を得たのか不明である。とはいえ、この天寧軍が実在していたことは、山西省朔州市出土の「周望墓誌」〔『隋唐五代』、一五三頁〕より明らかとなる。

其の年（＝長慶三（八二三）年）の四月廿五日を以て、権りに朔州の天寧軍城の西北三里の平原に<sup>16</sup>遷る。禮なり。

このように、被葬者の周望は朔州の天寧軍城付近に埋葬されている。孫瑜氏は、この墓誌は一九八〇年代に朔州市城区より発掘されたといひ「孫瑜二〇二二、七六頁」、天寧軍の位置を朔州の東南、雁門関がある句注山の際に比定している〔孫瑜二〇一二、八〇頁〕。この比定は、本文書において雁門関の前日に天寧駅に到達している状況とも合致するため、天寧軍と天寧駅を同地の地名とみて、従っておきたい。

雁門關……雁門関は朔州と代州の間にある句注山にあった。嚴耕望の示唆するところによれば、『新唐書』卷三九「地理志三代州雁門郡条」（一〇〇六頁）に「雁門、上。東陁關・西陁關有り」とある東陁關・西陁關が唐代の雁門関であるという〔嚴耕



望 一九八六、一三四九―一三五〇頁〕。「雁門関」の名での在証例としては、『資治通鑑』卷二四六「会昌二（八四二）年九月条」（七九六頁）に「劉 沔をして雁門關に屯せしむ<sup>18</sup>」とあって、唐後半期に存在していたことは判明するが、唐前半期の状況は不明である。

以上で検討した地理比定に基き、本文書の宿泊地点を地図上に落とすとおおむね次頁の【地図二】のようになる。

## 二 「馭程記断簡」の作成年代について

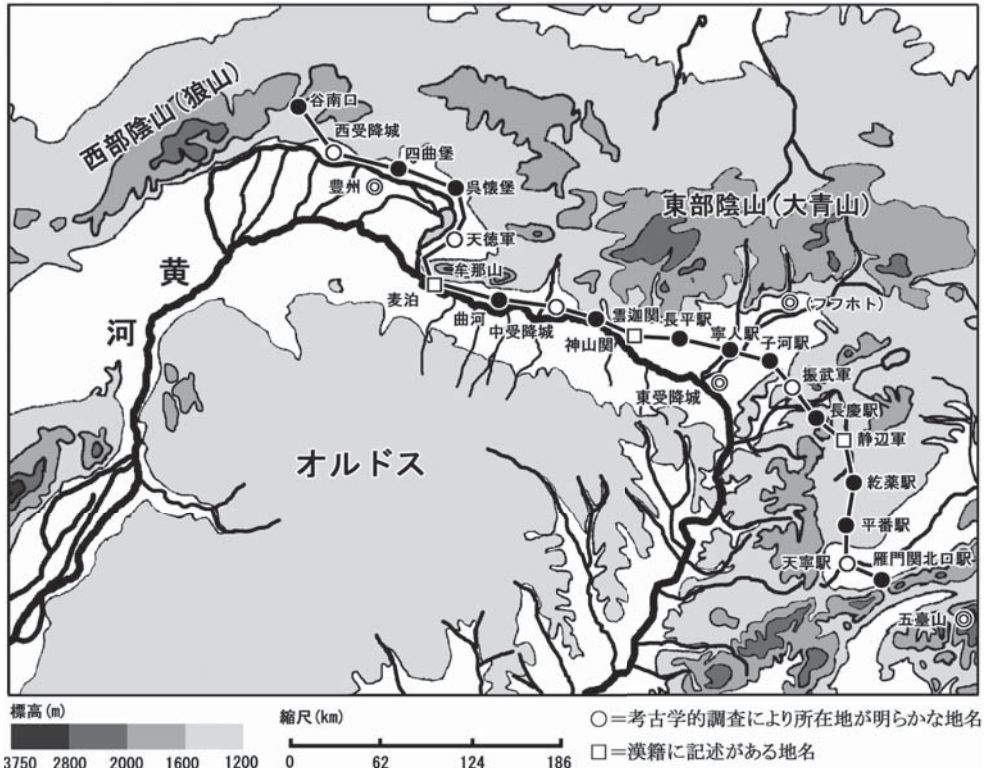
本章では、本文書がいつごろの時代の陰山周辺を記録しているか考察する。本文書を歴史史料として利用するためには、いつの史料なのか比定する必要があるからである。しかし、残念ながら本文書には紀年が一切無いため、歴史的状況と対照させる必要がある。まず、唐代にしか現れず、設置年代か具体的な位置か、いずれかが判明している地名を抜き出すと、次頁の【表一】のようになる。この表や前章の検討から、本文書は天徳軍が移置された八一三年以降に作成されたことは明確に指摘できるが、本文書の作成年代をさらに絞りこむことはできるだろうか。

注目すべきは「天徳は打毬<sup>※</sup>し、沙州専使を設く」という一文である。「沙州専使」の一行が、天徳軍でポロをし、さらに天徳軍によって供応されたというのである。上述したように、天徳軍は陰

山西麓の烏梁素海付近に作られた唐の軍事拠点であった。本文書の研究に先鞭を付けた高田時雄氏は、この「沙州専使」とは九世紀半ば以降、敦煌オアシスを支配していた沙州帰義軍節度使の公的使節のことであり、本文書の旅行者者のものであると指摘した〔高田 二〇一一、一二頁〕。従うべきであろう。

唐の勢力下にあった敦煌オアシスは、吐蕃によって七八六（貞元二）年に征服されたが〔山口 一九八〇、一九七一―一九八頁〕、八四八（大中二）年に敦煌オアシスの有力者であった張義潮が吐蕃の支配から脱出し、帰義軍節度使政権を確立した〔藤枝 一九四一、八七頁〕。吐蕃支配下の敦煌使節団が「沙州専使」と呼ばれるとは考えにくく、本文書の上限は帰義軍成立後の八四八年以降でしかありえない。さらに、帰義軍政権は十一世紀の前半期に西夏により滅ぼされるため、本文書の下限はそれ以前に限定されよう。

また、唐滅亡後の九二〇（神冊五）年十月になると、契丹の遼が唐支配下にあった天徳軍を陥落させてその住民を「陰山南」に移したとあり〔遼史』卷二「太祖紀下」（一六頁）〕、先行研究では、この時天徳軍が移された「陰山南」こそが、現在も遼代の仏塔が残るフフホト東郊の白塔村「豊州遺跡」であるとされている〔樊文礼 一九九三、七二―七三頁〕。それゆえ、この説に従えば、本文書の作成年代は九二〇年以前ということになる。しかし、『旧五代史』卷三二「莊宗紀六」（九三九頁）によれば、九二五（同光三）年六月癸丑に劉承訓が天徳軍節度觀察留後に任命されてお



【地図 1】『内蒙古自治区地図集』（中国地図出版社，2007），pp.10-11より作成

【表 1】

唐代地名	比定される遺跡	根拠	設置年代	在証例
西受降城	烏加河古城(奮斗古城)	趙占魁 1993, pp.61-64	708(景龍2)年	旧93(p.2982)
天德軍城	巴彥淖爾市烏拉特前旗額爾登宝拉格蘇木陳二壕村	張郁 1981, 1997	813(元和8)年 ※移置年代	元4(pp.113-114)
中受降城	包頭市敖陶窰子村北	劉幻真 1994	708(景龍2)年	旧93(p.2982)
雲迦(伽)関	—	—	830(太和4)年 ※復置年代	冊410(明版, p.4876)
振武(軍)	呼和浩特市和林格爾県土城子遺跡	齊藤 2009, pp.29-30	745(天寶4)年	元4(p.108)
天寧駅(軍)	朔州市城区出土「周望墓誌」	孫 2012, pp.76, 80	不明	—

旧 = 『旧唐書』 元 = 『元和郡県図志』 冊 = 『冊府元龜』

り、これは後唐が天徳軍を遼から奪還した結果であるとする説もある〔栗原一九八八、六四七頁、注三三〕。とはいえ、十一世紀前半に西夏が建国されると、陰山南麓は包頭付近で西夏と契丹とがにらみ合う状況になる〔楊蕤二〇〇三、二九頁〕ため、使者が安全に通行できる環境とはいえない。つまり、陰山地域の歴史状況に鑑みても、やはり下限は十一世紀前半なのである。

この八四八年から十一世紀前半の間で、帰義軍の使節が天徳軍に到来しうる時期として最もあり得るのが、張義潮が吐蕃支配から脱した直後である。張義潮は独立を達成した後、唐と連絡するため使者を派遣した。その時のことは史料に次のように現れている。

『資治通鑑』卷二四九「大中五（八五二）年十一月条」（八〇四九頁）

『考異』に曰く、……（中略）……『實録』を按ずるに、「五年二月壬戌、天徳軍奏すらく、『沙州刺史の張義潮・安景旻及び部落使の閻英達等、使を差わして上表し、請うに沙州の降るを以てす』と。……（後略）」<sup>19</sup>

このように、敦煌からの使者が天徳軍に到来したことが分かる。敦煌から天徳軍に到来するためには、河西回廊から北方にあるエチナオアシスに北上し、さらに北行して漠北を経由して南下し、

漠南の天徳軍へ到る経路がある〔趙貞二〇〇一、八三一―八四頁〕趙貞二〇一〇、一五二―一五四頁〕。その年代は、藤枝晃氏によれば、八五〇（大中四）年に天徳軍まで沙州の使者が到来し、その情報が八五一（大中五）年二月に唐朝廷に報告されたという〔藤枝一九四一、八七―八八頁〕。

では、それ以降、唐と帰義軍の使者の往来で天徳軍が使われたのだろうか。趙貞氏によれば、八五六（大中十）年十一月に長安を出発し東部天山山脈付近にいた西ウイグルへ向かった冊立使は、靈州からまだ帰義軍の支配下に入っていなかった涼州を避けてエチナへと渡り、甘州を経由して沙州を目指したという〔趙貞二〇一〇、一五四―一五五頁〕。この使者は帰義軍の使者そのものではないが、少なくとも当時河西回廊の一部が利用可能であったことは確かだろう。

さらに、八六一（咸通二）年になると、帰義軍政権が勢力を伸張して涼州まで支配下に入れ、河西回廊の制圧に成功する。その結果、靈州から涼州へ渡り、河西回廊を通るルートが東西交通の主要幹線として、時に不通となることはあるものの、一般的に利用されるようになるという〔趙貞二〇一〇、一五七頁〕。それゆえ、あえて遠回りになる天徳軍経由のルートを帰義軍の使節が取ることは考えられず、事実、最初の八五〇年の使節到着以来、天徳軍に帰義軍の使節が来たという記録も皆無である。天徳軍に帰義軍の使節が到来したのは、八五〇年代前半だけの特殊な状況なの

である。

以上のように、帰義軍の使者の往来を含む東西交通路の状況に鑑みれば、河西回廊を通らず天徳軍に到来している本文書の「沙州專使」とは、八五〇年代前半の使節であると考えられる。その使節とは、八五〇年の最初の使節と断言することはできるだろうか。

帰義軍節度使から唐への使者が通った経路を検討した趙貞氏によれば「趙貞二〇〇一、八三一―八四頁／趙貞二〇〇二／趙貞二〇一〇、一四九―一五三頁」、八五〇年に到来した使者については敦煌発現のP二七四八V文書の「大中四年状」に記録があるという。本文書は裁断されていて上半分しか残っていないため文意が判然としないものの、一行目に「大中四年七月廿日、天徳」「という文言があり、八行目に「等七人於靈州□」「という文言があるため、八五〇（大中四）年七月に天徳に到来した沙州使節が、靈州を通って長安まで向かったと考えられるという。

ところが、これに対して李軍「二〇一〇」は、この時の沙州使節の到来は八五一（大中五）年二月に長安へ報告されているので、前年の七月に到来したのでは早すぎると考え、P二七四八V文書の一行目から一一行目は沙州使節とは関係ない文言であるとした。それゆえ、八五〇年七月に沙州使節が天徳から靈州を経由して長安に到達したとはいえず、沙州使節は当時の最短ルートであるオルドスの中の夏州路を通過したと結論づけた。

しかしながら、さらに村井恭子「二〇一〇、二八六―二八八頁」は李軍氏に反論し、この時期オルドスではタングートが大反乱を起こしており、特に八五〇年から八五一年七月にかけて大規模な戦闘が起こっていたため、沙州使節が夏州路を通ることはできず、やはり靈州を通ったはずで、八五〇年の使節であると述べている。

このように、様々な意見は出ているものの、いずれにせよこの最初の沙州使節が雁門関を通ったとは考えられておらず、「駟程記断簡」の使節が通ったルートとは合わない。そのため、これまで知られていなかった使節団の記録である可能性も否定できず、現時点では八五〇年代前半の使節とするに留めておきたい。本文書の沙州使節は高田氏が推測するように五臺山に向かった可能性もあり「高田二〇一一、一二三頁」、唐代の史料中に到来が記録されていない使節団であるとも考え得るからである。本文書は、そういったいずれかの沙州使節団の路程を書き記した記録であったと考えられる。以上の検討から、本文書は唐後半期、九世紀なかばの陰山山脈周辺の状況を伝える史料として利用できるのである。

### 三、「駟程記断簡」にみる陰山山脈周辺の状況

前章で述べた通り、「駟程記断簡」の記述は八五〇年代前半の陰山山脈周辺の旅行記録であった。そこで本章では、本文書より得られる断片的情報を総合して、唐後半期の陰山山脈周辺の状況を考察してみたい。

## (一) 交通路

まず、本文書には九月七日に雲伽関に宿泊して以来、振武軍城をはさんで欠損部直前の「雁門関北口駅」まで、一貫して駅に宿泊し続けている。唐代の交通路を総合的に検討した嚴耕望氏の付図によれば、振武軍以西には一部を除き駅道が走っていないかったことになっている。「嚴耕望 一九八五A、図六」が、本文書の記述はその結論を覆している。しかし、従来からあった史料からでも、八四〇年代に大同盆地から振武軍方面に駅道が走っていたことは、推定が可能であった。

李徳裕『会昌一品集』卷十四「要條疏边上事宜状」(『校箋』二五二―二五三頁)

一、回鶻は猶お雲州に在りて頗る邊境を擾す。二州の蹤跡に據れば、必ず深遠の謀無からん。慮る所は、邊上の奸人の走りて回鶻に投じ、其れの為に設計し、雲・朔等州に在りて天徳・振武への驛路を斷たしむることなり。……(後略)<sup>20)</sup>

この上奏文は、南走派ウイグルにそなえるために宰相の李徳裕によつて提出されたものである。南走派ウイグルとは、八四〇年に漠北のトルコ系遊牧国家であるウイグルが、黠戛斯<sup>タルギス</sup>によつて国を滅ぼされて四散したうちで、南方の陰山山脈に向けて逃れた遺民の一派を指す。この上奏文の起草時期は、岑仲勉氏によつて八四

二(会昌二)年八月下旬作成と推定されており「岑仲勉 一九三七、四〇五頁」、中島琢美氏もこの推定に従っている。「中島 一九八三、表一(二)」。この記事では、南走派ウイグルが大同盆地にある雲州・朔州から、振武軍・天徳軍へと向かう駅道を断絶させることが憂慮されている。この記述と「駅程記断簡」の記述とを合わせれば、振武軍から少なくとも雲伽関まで駅道が延びていたことが明らかとなる。

荒川正晴氏によれば、唐の駅道とは国都と州府を結ぶ政治・軍事上の重要幹線であると同時に、地方と中央の統属関係を表す貢道でもあり「荒川 二〇一〇、一六六―一七六頁」、唐前半期には直轄州府を越えて羈縻州府を設置した外地にまで延びていたという「荒川 二〇一〇、一七六―一八二頁」。そして、駅道の中でも主要駅道には官営施設である駅が置かれ、主要駅道から外れた駅道には駅に対応する館が置かれていた「荒川 二〇一〇、二二〇―二二二頁」。このように、駅は主要駅道だけに置かれるはずのものであり、振武軍以西の道程は主要路と認められていたと考えられる。<sup>22)</sup>

では、雲伽関から先には駅道は存在しなかったのだろうか。嚴耕望氏は、八〇一(貞元十七)年に撰述され、『新唐書』卷四三下「地理志七下」に引用される賈耽の『四夷述』<sup>23)</sup>などを利用してウイグル牙帳までの路程を検討した。それによれば、中受降城から北行して呼延谷(現・包頭市昆都侖河谷)を抜け、天徳軍を経由し

て漠北へ抜ける路程が復元されている〔嚴耕望 一九八五B、六〇八一―六〇八二頁〕。呼延谷を抜けるルートは『四夷述』には次のようにある。

『新唐書』卷四三下「地理志七下 所引『四夷述』」（二一四八頁）

中受降城の正北より東に如くこと八十里にして、呼延谷有り。谷の南口に呼延柵有り、谷の北口に歸唐柵有り、車道なり。回鶻に入りたる使の經る所なり。<sup>24)</sup>

このように、呼延谷は馬車でも通れる大道なのであって、唐からウイグルへ向かう外交使節はこのルートを通るといふ。こちらが陰山を通過する本道なのは明らかであり、駅道であった可能性が高い。<sup>25)</sup> 本文書の使節は何らかの理由でこのルートが通れなかったため、雲伽関以西では駅に泊まっていけないのであろう。本文書を見る限り、天徳軍以北には駅道はなかったようだが、天徳軍までは駅道が走っていた可能性が高い。

以上のように、雁門関より振武軍・呼延谷を経由して、天徳軍まで駅道が整備されていたと考えられる。それでは、なぜ陰山山脈周辺という唐の「辺境」に駅道が整備されたのだろうか。この点を考えるには、ウイグルとの外交関係を視野に入れる必要があるだろう。

ウイグルは安史の乱で唐に援軍を送り平定に貢献したことから、唐に大きな貸しを作ることとなった。それゆえ、乱平定後にウイグル優位の外交関係が構築され、唐から絹布、ウイグルから馬を出し合う「絹馬交易」が盛んに行われた<sup>26)</sup>ほか、ウイグル可汗が代替わりするたびに、唐皇帝の実の娘（真公主）が可汗に嫁いであり、両国の関係は緊密だった<sup>27)</sup>。そして、両国の外交使節の往来もまた頻繁だった。

石見清裕氏によれば「石見 一九九六、三三九―三四三頁」、唐に入国した外国使節は都へ向かうに当たって駅伝を利用することが許可されていたという。『新唐書』卷四六「百官志一 礼部」（一九六頁）にある唐の規定によれば、外国使節は駅馬・伝馬に乗って長安に向かうことができたが、唐後半期の駅伝制の弛緩によってこれは機能しなくなった。それでも、入唐した外交使節は駅伝の宿泊施設を利用することが可能だったという。

つまり、すべての入国した外国使節は駅伝（の宿泊施設）を利用して入朝することになっていた。まして、ウイグルは唐にとつて吐蕃と並ぶ最重要国であり、その入朝路を駅道として整備することは必須だったと考えられる。だからこそ、陰山の南麓には駅道が整備されていたと考えられる。八四〇年のウイグルの崩壊直前まで両者の外交は続いていたため、「駅程記断簡」が記録された八五〇年代にも駅道は残存していたのである。

もちろん、この陰山の駅道は軍事上も重要な意味合いをもって

いた。陰山南麓には振武軍・天徳軍・三受降城といった軍事拠点  
が作られ、ウイグルとの目立った戦闘がなかったために弛緩して  
いくものの<sup>28</sup>、唐末まで存在し続けた。振武軍と天徳軍の関係につ  
いては『会昌一品集』に次のようにある。

『会昌一品集』卷二「條疏太原以北辺備事宜狀」〔校箋〕二  
三三―二三五頁）

今虜衆（ウイグル）は陰山の北に在り、山中に盡く過路有  
り。若し山の南に突出し、便ち二城（東・中受降城）に入れ  
ば、即ち天徳・振武は當時に隔斷せられん<sup>29</sup>。

この記述は、南走派ウイグルによって東受降城・中受降城が占拠  
され、振武軍と天徳軍の連携が途絶することを憂慮している。振  
武軍・天徳軍の連携は当然交通路の整備によって実現するもので  
あるから、両者をつなぐ駅道は軍事上の連絡にも非常に重要な意  
味を持っていたことがわかる。これらの軍事拠点は振武軍と天徳  
軍を東西の中心として、東受降城と中受降城をはさんで交通路に  
よって結ばれていたのである。

以上のように、陰山山脈周辺の交通路はウイグルとの頻繁な交  
流のために、あるいはウイグルの侵攻を防備するための軍事的連  
携のために整備され、駅道として機能していたと考えられる。漠  
北よりゴビを越えて陰山山脈まで到達する道は、唐前半期には北

方遊牧民の入貢路である「参天可汗道」として名高く、唐後半期  
になっても「回紇路<sup>30</sup>」と呼ばれて盛んに利用されたことが先行研  
究によって指摘されているが、陰山山脈南麓の交通路はこれまで  
見過ごされがちであった。しかし、「駅程記断簡」の発見と唐・ウ  
イグル間の外交関係を考慮することで、唐後半期における陰山周  
辺の交通路の実情がわずかではあるが明らかとなった<sup>31</sup>。

「駅程記断簡」に従えば、東方では少なくとも雁門関までは駅道  
が設置されている。雁門関以南には太原を経由して長安や洛陽へ  
向かう交通路が整備されていて、『元和郡県図志』卷四「関内道  
四单于大都護府条」（一〇八頁）によれば、この道は「太原路」  
と呼ばれていた。雁門関まで駅道が設置されており、太原路と名  
が付いて国都まで続く道である以上、雁門関以南も駅道が設置さ  
れていたとみるべきだろう。モンゴル高原との盛んな交流や軍事  
的緊張の中、使節の往来と情報網の整備のため、天徳軍と国都は  
駅道で結ばれていたのである。

## （二）天徳軍の役割

次に、本文書のハイライトともいえる天徳軍について検討して  
みたい。本文書の三〜四行目にあるように、沙州専使は天徳軍に  
およそ十日間も滞在し、ポロを行うなどのもてなしを受けている。  
本文書中では、三泊以上していることどころか、宿泊地以外の情  
報が記録されているのが天徳軍だけなのである。なぜ天徳軍で彼

らは長期滞在をしているのか。この点を天徳軍が持っていた外交上の役割から検討してみたい。

天徳軍は七五三（天宝十二）年に朔方節度使下の鎮軍<sup>32</sup>として設置されたが、規模が大きくなりすぎた朔方節度使の勢力削減のため、もとの管轄区域を八つの軍鎮（京西北八鎮）に分割し、その結果、七九六（貞元十二）年に天徳軍都防禦使として独立した「李鴻賓（二〇〇〇、一三二六頁）」。

さて、本文書においては、天徳軍で沙州使節が迎接を受けている点が注目される。なぜ天徳軍なのだろうか。陰山山脈付近の鎮軍でいえば、節度使が設置された振武軍の方が規模が大きく、さらに長期滞在をする選択肢もあったはずである。天徳軍に関する従来の先行研究では、沿革・兵力の規模・地理比定などを概観するものはあっても、本文書に現れるような使節の迎接について論じたものはないため、その理由を以下で考察したい。

まず、地形面から考えてみたい。第一章で述べたように、天徳軍の所在地は陰山西部南麓の巴彦淖爾市烏拉特前旗額爾登宝拉格蘇木陳二壕村にあったことは間違いない。そして、当地域には唐前半期から、鞏臯州府に配属された漠北の遊牧民と、唐との接点があった。

『元和郡県図志』卷四「関内道四 天徳軍条」（二二三頁）

貞観二十一年（六四七）年、今の西受降城の東北四十里に燕然

都護を置き、瀚海等六都督・臯蘭等七州を以て並びに隸こわしむ。<sup>34</sup>

このように、前年に滅亡した漠北の薛延陀可汗国の遺衆を統御するとして、六四七年に設置されたのが燕然都護府である。「cf. 岩佐 一九三六、九一―九三頁」。燕然都護府は、漠北の遊牧民も管轄範囲とするもの<sup>35</sup>、漠南にあった西受降城付近に設置されたことがわかる。西受降城は第一章で上述したように、烏拉特中旗烏加河郷の烏加河古城（奮斗古城）に位置比定されており、そこから東北四十里（約一七・六km）の地点に燕然都護府はあったとされ、陰山南麓にあったと考えられる。

燕然都護府がこの位置に設けられた理由として、岩佐精一郎氏は漠北の遊牧民の入貢路、いわゆる「参天可汗道」の終着点がこの付近に当たっていたことを指摘する「岩佐 一九三六、九三―九四頁」。そして、『新唐書』卷二七上「回鶻伝上」（六一―二三頁）には「乃ち詔して磧南の鶻鵝泉の陽に、過する郵六十八所を置く<sup>36</sup>」とあり、「参天可汗道」の南端は鶻鵝泉であったとされる<sup>37</sup>。嚴耕望氏は、上でも紹介した『新唐書』卷四三下「地理志七下」所引の賈耽『四夷述』を根拠として、鶻鵝泉は西部陰山西端近くにあつて、唐前半期のみならず後半期における唐・ウイグル間の路程でも經由地となっていたとする「嚴耕望 一九八五B、六一―六一三頁」。つまり、漠北から漠南へ通じる道は、唐前半期にせよ、後



半期にせよ、少なくともその南端の位置は変わっておらず、西部陰山の鷓鴣泉付近に到達するのである。

以上のように概観すると、陰山山脈の中でも西部陰山の南麓地域は、漠北からゴビ・陰山を越えてきた使節が、初めて唐の拠点と接触する地ということになる。それゆえ、岩佐氏が推測するように、この地に遊牧民を管轄する燕然都護府が設置されたと考えられる。

そして、燕然都護府廃止後の七〇八（景龍二）年に設置された西受降城も、同様の機能を持っていた。

『旧唐書』卷一九四上「突厥伝上」（五一七七頁）

（開元）十五（七二七）年、小殺（シヤド）（ハ毗伽可汗 Bilga Qaghan）は其大臣の梅録啜（メイロクシュエ）を使わして來朝せしめ、名馬三十匹を獻す。時に吐蕃は突厥の小殺に書を與え、將に計議して同時に入寇せんとす。小殺は并せて其の書を獻ずれば、帝は其の誠を嘉し、梅録啜を引いて紫宸殿に宴し、厚く賞賚を加う。仍お朔方軍の西受降城に互市の所を爲るを許し、毎年縑帛數十萬匹を齎（あた）え邊に就きて以て之れを遺る。<sup>(38)</sup>

西受降城は、第一章で述べたように突厥の侵攻を防ぐ目的で設置された軍事拠点であるが、この記事から、突厥が七二七年に吐蕃の書信を唐に提供した功績によって、西受降城で互市を行うこと

を許可されたことが分かる。<sup>(39)</sup>この他、『唐會要』卷七二「馬条」（一五四三頁）にも、七四七（天寶六）年十二月に堅昆（キシギス）や室韋が西受降城に馬を献上した記事があり、西受降城もまた漠北の遊牧民と唐とが接触をもつ場として機能していたとみてよい。

では、今問題になっている天德軍は同様の機能を持っていたのだろうか。次頁の【表二】を御覧いただきたい。これら、①～⑤は外国使節が天德軍に到來し、唐と接触した事例である。①は唐からウイグルへ出嫁する太和公主を迎えに來たウイグル使節の到來を天德軍が報告している。到來した黃蘆泉の位置は明らかではないが、天德軍が報告しているため、その近辺と考えられる。

②は吐蕃の有力者が書信を携えて天德軍を訪問していて、ウイグルのみならず、唐からみて西方の吐蕃からも天德軍に使節が到來していることがわかる。この使者を派遣してきた論夷加が何者か、不明である。

③は南走派ウイグルの一首領である嗚没斯に対する詔勅の一部であるが、嗚没斯の接触先が天德軍であり、唐はそれに対して鴻臚卿の張賈を派遣して応対している。おそらく、張賈が嗚没斯らと接触したのも天德軍であった。

④はウイグル可汗国を滅ぼし、南走派ウイグル到來のきっかけとなったキルギスが、唐に接触を図るために送ってきた使節の記事で、やはり天德軍に使者を派遣している。それに対しての唐の反応は④の記事からは窺えないが、次の墓誌史料から明らかとな

【表2】

	年代	到来勢力	書誌情報	史料内容
①	821(長慶元)	ウイグル	旧195 (pp.5211-5212)	[長慶元(821)年]十一月、振武節度張惟清奏、「準詔發兵三千赴蔚州、數内已發一千人訖、餘二千人、待太和公主出界即發遣」。又奏、「天德轉牒云、『迴鶻七百六十人將駝馬及車、相次至黃蘆泉迎候公主』」。豐州刺史李祐奏、「迎太和公主迴鶻三千於柳泉下營、拓吐蕃」。
②	837(開成2)	吐蕃	冊980 (宋本 p.3916)	[開成]二(837)年十一月、天德奏、「吐蕃東北道元帥論夷加差使、信物及木夾到本道、以其書信上聞」。
③	841(會昌元)	南走派ウイグル	会5 (pp.73-74)	敕。回鶻嗚沒斯特勤・那頡啜特勤・頡于伽思・於解亦阿耽于思莫賀達干・宰相伊難朱密伽謠略・摩咄將軍謠略等。天德軍通所奏表至、再三省覽、憂屬良深。(中略)又慮邊境守臣、見卿忽至、或懷疑阻、不副朕心。故遣鴻臚卿張賈馳往安撫。
④	842(會昌2)	キルギズ	資246(p.7968)	黠戛斯遣將軍踏布合祖等至天德軍言、「先遣都呂施合等奉公主歸之大唐、至今無聲問、不知得達、或爲奸人所隔。今出兵求索、上天入地、期于必得」。
⑤	851(大中5)	沙州	資249(p.8049)	『考異』曰(中略)按『實錄』、「五年二月壬戌、天德重奏、『沙州刺史張義潮・安景旻及部落使閻英達等、差使上表、請以沙州降』。……(後略)」

旧=『旧唐書』 資=『資治通鑑』 冊=『冊府元龜』 会=『會昌一品集』

る。

八六〇(大中十四)年作成「李敬実墓誌」(『西安碑林』(下)、八〇六一―八〇九頁)

會昌の初めに至り、北虜(ウイグル)は喪滅し、黠戛斯<sup>キルギス</sup>は朝に歸順す。武宗皇帝は周・漢に比し、犬戎に冠帯せしめんと欲するも、切に蕃情の防ぎ難きに縁り、須らく辨捷の長才にして、往きて密命を宣するを得べし。公は乃ち皇王の意を銜<sup>く</sup>み、天德に往きて招諭す<sup>40</sup>。

この墓誌の記述は④の記事に対応すると考えられる。唐はキルギスから天德軍へ送られてきた使者に対して、応対の使者を天德軍に送ったのである。

以上のように、天德軍においても外交使節の到来やその使節の応対といった事例がみられる。交通路上、漠北に最も近い位置にあった天德軍は先行する燕然都護府や西受降城といった拠点と同じく、唐から漠北への玄関口であり、漠北の情報や唐へ伝える機関として重要な位置にあったといえる。それゆえ、「駅程記断簡」の使節も天德軍におよそ十日間滞在し、ポロを楽しむなどの供応を受けたものと思われる。使節を受け入れる設備が天德軍には整っていたのである。

さらに、天德軍が唐の北の玄関口であったという点に関して、

以下の史料がある。

元稹「進西北辺図経状」(『元氏長慶集』卷三五、四〇六頁)  
又た太和公主下嫁すれば、伏して恐るらく聖慮して其の道の遠きを念わん。臣は今具さに天徳城已北の回鶻衛帳已來に到る食宿・井泉を録し、圖經の内に附す。<sup>11)</sup>

この上奏文は、憲宗の娘でウイグルの崇徳可汗に嫁いだ太和公主「cf羽田 一九五七、二二五―二二五頁」が出嫁する八二一年五月の直前に作成されたという「嚴耕望 一九八五B、六一七頁」。この上奏文では、太和公主が通るであろうモンゴル高原の道筋を、ウイグル牙庭周辺まで記録したとあるが、その始点となっているのが天徳軍である。同様の事例は『新唐書』卷二一七下「回鶻下 黠戛斯条」(六一四八頁)に記録される唐から黠戛斯への道程にもみられていて、黠戛斯牙庭へ向かう唐からの始点はやはり天徳軍となっている。このように、唐後半期には天徳軍が唐とモンゴル高原とを分かつ境界地点として認識されていたのである。

さらに、表二の②のように天徳軍には吐蕃からも使者が到来している。回鶻路を通ってきた帰義軍の使節も同様ではあるが、西方から来た使節団はたとえ陰山西部に到達したとしても、黄河沿いに南下して靈州に出れば、長安へ行くには最も効率的であり、わざわざ天徳軍を経由するのは遠回りになる。にもかかわらず、

天徳軍に使者が到来しているのは、天徳軍が唐の北の窓口となっていて、陰山に到着した使節はまず天徳軍と接触するのが手筈になつていたからではないだろうか。それだけ天徳軍の外交上の知名度が高かった証と言えるだろう。当時の国際関係において、天徳軍は極めて重要な地位を占めていたのである。

### (三) 館の役割

次に、使節を受け入れる場として「館」について検討する。館とは、上述したように、主要ではない馭道上の官營施設である。「馭程記断簡」では、「天徳軍城南館」に沙州使節は宿泊しているが、そのことはどういった意味を持つのか。荒川正晴氏は、唐前半期において、鞏州府所屬の遊牧民が「参天可汗道」を通じて唐に貢納を行い、そしてそれに対する賜物を授与する場が、安北都護府や单于都護府の治所に設けられた馭館であったと述べる「荒川二〇一〇、二八四―二八六頁」。さらに、トゥルフアンの西州において、突騎施テュルキシの首領が館に滞在して馬の交易を行っていたと推測し、遊牧使節を接待する場として館が機能していたと指摘している「荒川二〇一〇、二八七―二九〇頁」<sup>12)</sup>。

荒川氏の検討した事例は、唐代前半期、八世紀初めまでのものであった。都護府を利用した広域支配は唐後半期には崩壊してしまふ。では、後半期にも館を利用した使節の接待は一般的に行われていたのであろうか。

まず、日本からの遣唐使の場合をみると、八三八（開成三）年に入唐した遣唐使節は、到着先の揚州で長安へ向けての出発まで水館とも呼ばれる平橋館に宿泊していたことが『入唐求法巡礼行記』巻一に記録されている。「小野 一九六四A、二二四―二二八頁」。さらに、東北辺に当たる幽州では次のような記事がある。

『新唐書』巻二一九「北狄伝 契丹」（六一七―二頁）

至徳（七五六―七五七）より後、藩鎮は地を擅はしまにし務めて自安し、鄆成・斥候は益ます謹しめば、事を邊に生まず。奚・契丹も亦た入寇すること鮮すくなく、歳ごとに酋豪の數十を選びて長安に入りて朝會すれば、引見する毎に賜與は有秩（莫大）にして、其の下の率いたる數百は皆な幽州に駐館す。<sup>43</sup>

唐後半期の東北方面では、幽州を窓口として奚・契丹を館でもてなし、長安へ入朝する数十名を除く數百名はそのまま幽州に留まって館に滞在し続けたことが分かる。すなわち、東北方面でも天德軍と同じく、外国使節が拠点に到来して館で迎接される状況があった。使節団のうち、ごく一部の人員のみが入朝できる状況は日本の遣唐使団でも同様で、円仁が同行した承和の遣唐使の場合、入朝の許可を得ることができたのは三五名のみで、二百七十名は窓口となった揚州に残留しなければならなかった。「小野 一九六四A、二九頁」。仮に「駅程記断簡」に現れる帰義軍の使節団が入朝

使節だった場合、天德軍に大部分の人員が残留した可能性が高いだろう。

このほか、『入唐求法巡礼行記』巻二「開成五（八四〇）年三月二日条」には、山東半島の登州に新羅館・渤海館なる施設があった、入唐する両国人の公的宿泊所であったとする指摘があり「小野 一九六四B、二四九、二五一、二五五頁、注一三二」、揚州と同じく海上から入唐する外国人が宿泊する施設であった。

また、ウイグルの使節が館に宿泊していた例も次の史料で確認できる。

『旧唐書』巻二六五「柳公綽伝」（四三〇―四頁）

是の歳（＝太和四（八三〇）年）、北虜（＝ウイグル）は梅祿將軍の李暢を遣わして馬萬匹を以て來りて市あきない、託かこちて入貢と云う。經る所の州府の守帥は之れに禮分を假り、其の兵備を嚴しくす。館に留まれば則ち卒を外に戒しめ、其の襲奪むさを懼おそる。太原の故事は出兵して之を迎ゆるも、暢界上に及ぶに、（太原尹・河東節度使の柳）公綽は牙將の祖孝恭を使わして單馬にて勞問せしめ、待するに修好の意を以てす。<sup>44</sup>

このように、漠北からウイグルの使節が入貢と称して唐に入国した際、館に滞在しながら移動していたことがわかる。柳公綽は武装した兵士によって監視するのが通例であったウイグル使節を、

武装解除した状態で迎え入れていた。通例ができあがるほどウイグル使節は頻繁に唐の館に宿泊していたといえる。

以上のように、荒川氏が検討した唐前半期の事例と同じく、唐後半期にも外国使節が入唐する際には各地の館に宿泊していたことが明らかとなった。その場合、どの例をとっても駅道上の館ではなく、窓口となる州府の館に宿泊していることは指摘できるだろう。上で述べたように、唐前半期にも「參天可汗道」を通じて入唐した羈糜州府の使節は、都護府の駅館で接待を受けていた。唐後半期にも都護府が州府に変更された上で、各地の館において外国使節を迎接するという形態は全国で変化なかったといえる。陰山では、州府に代わって天徳軍で迎接が行われており、「駅程記断簡」はその迎接の様子を記録したと考えられるのである。<sup>45)</sup>

### おわりに

本稿では、「駅程記断簡」と通称される敦煌文書、羽〇三二文書の検討を通じて、九世紀の陰山山脈の歴史地理について論じた。まず、本文書に現れる地名を漢籍史料と考古学的な成果に基づき比定した。さらに、本文書の作成年代を検討し、八五〇年代に沙州敦煌の使節が陰山山脈付近を通過した際の路程を記録したものであることを指摘した。そして、その地理比定と年代比定に基づき、陰山山脈南麓に漠北のウイグルとの外交に対応するための駅道が整備されていたことを指摘した。この駅道は有事の際に陰山

南麓の軍事拠点間が連絡するためにも使用されていた。

さらに、「駅程記断簡」の使節が約十日間滞在した「天徳軍城」は、漠北へと通じる唐の玄関口に当たる西部陰山地域に設置された軍事拠点であった。この城郭は、西部陰山地域の地理的特性のため、漠北から到来した使節の迎接を担当することとなったと考えられる。それゆえ、本文書の使節も天徳軍で長期滞在をしたのである。そして、本文書の使節が宿泊した「館」は、外交使節が訪れる唐の各地に設置されて施設の宿泊所となっており、使節の迎接の場にもなっていた。これは唐前半期に「參天可汗道」を通じて入唐した羈糜州府の使節が、安北都護府や单于都護府といった使節の駅館で貢納を行い、その見返りに迎接を受けていたことと軌を一にしている。唐の外交使節に対する対応は、唐前半期でも唐後半期の九世紀でも根本的な方法は変わっていなかったことになろう。

唐後半期の陰山山脈は、ウイグルの襲撃に備えるための軍事拠点が設置されていたものの、安史の乱終結後にウイグルとのあいだで結ばれた和平によって、戦闘が行われることはほとんどなくなった。「林一九九二、一一九一二二頁」。それゆえ、徐々に防衛体制が弛緩していったことは既に述べた通りである。

とすれば、唐後半期の陰山山脈の軍事拠点は、軍事上の要請よりもウイグルとの外交に重点が置かれていたと考えざるをえない。黄利平氏によれば、天徳軍は京西北八鎮のうちで唯一「節度使」

ではなく「都防禦使」であるので、八鎮のうちで最弱の軍鎮であった「黄利平 一九八九、一二五頁」。たとえ、氏の述べる通り天徳軍が軍事上は最弱であったにせよ、独立の地位を保証されていたことは見逃すべきではないだろう。天徳軍は軍事面以外で存在意義を持っていたのであり、それこそが西部陰山地域の地理的特性を生かした情報収集や使節の接待といった機能であったと考えられる。一方、東部陰山の軍鎮であった振武軍には節度使が置かれており、陰山南麓の軍事面を支えていたのはこちらだったといえるだろう。振武軍と天徳軍という陰山東西に置かれた二つの軍鎮は、機能面で使い分けられていたのである。

従来、唐代の「軍」とは、軍事に特化した存在であると漠然と認識されていたが、天徳軍はそうではなく、むしろ軍事面よりも外交面を主要な機能とした軍鎮であった。他の全国に置かれた軍鎮についても、機能面から再評価する作業に意味はあるだろう。さらに、日本の使節団の窓口となった揚州や奚・契丹の窓口となつた幽州も含めて、唐の外交窓口がどこで、どこの使節を受け入れているか、という点も、唐と周辺地域の繋がりを知る上で重要であろう。

このように、農耕民と遊牧民の接点である陰山山脈は、遊牧民の侵入を防ぐのみならず、遊牧民との外交という点でも重要な地域であった。それゆえ、政治問題化する危険をはらみつつも、唐は陰山南麓の軍事拠点を維持し続けていたのである。この陰山

南麓からは次代の中国史を担うトルコ系遊牧民の沙陀が登場するが、その最初の根拠地の一つとして振武軍があることは、唐の軍事拠点と遊牧民との関係が持つ歴史的重要性の証左である。陰山山脈とその周辺地域における農耕民と遊牧民の接触について、さらなる検討が必要なのである。

## 註

- (1) 例えば、妹尾「二〇〇九、一一三―一二〇頁」、森安「二〇〇七、五九―六二頁」などで「農牧接壌地帯」の重要性が論じられている。
- (2) 唐王朝に対して遊牧民が果たした役割の重要性については、石見一九九八の中で繰り返し議論されているほか、石見一九九九／石見二〇〇八／Iwami 2008／石見二〇一〇などでも論じられている。
- (3) 本稿ではゴビ北方の北モンゴル草原地帯を「漠北」、ゴビ南方の南モンゴル草原地帯を「漠南」と呼ぶ。
- (4) 本文書群の伝来などは、榮新江一九九七／落合二〇〇一／落合二〇〇四／高田二〇〇四／高田二〇〇六／高田二〇〇七／榮新江二〇〇七A／岩本二〇一〇／岩本二〇一三、一三八―一六二頁を参照のこと。
- (5) 『敦煌秘笈』「二二八頁」の記載によれば、本文書は寸法が縦三〇・七cm、横一七・六cm、紙質は「麁悪厚紙」であり、色は「青白椽」である。
- (6) 西城 九原郡北黄河外八十里、景龍中韓公張仁願置。
- (7) 「北館文書」については、大津「一九九三」とそこに引かれた先行研究を参照のこと。
- (8) 其城居大同川中、當北戎大路、南接牟那山錯耳鬣、山中出好材木、若有宮建、不日可成。牟那山南又是麥泊、其地良沃、遠近不殊。
- (9) 先是、朔方軍北與突厥以河爲界。河北岸有拂雲祠、突厥將入寇、必

- 先詣祠祭爵求福、因牧馬料兵、候冰合渡河。時默啜盡衆西擊娑葛、仁愿乘虛奪取漠南之地、築三城、首尾相應、絕其南寇之路。留年滿兵助成其功。以拂雲祠爲中城、與東西相去各四百里、皆據津濟、遙相應接。
- (10) 李泳爲振武軍節度使、太和四年七月上言、「先管内修雲伽關、畢功、并進畫圖一軸」。又奏「差兵馬一千人、赴雲伽關守」。
- (11) 金河。中。天寶四年置。本後魏道武所都。有雲伽關、後廢、太和四年復置。
- (12) 武宗立、遷檢校尚書左僕射。回鶻寇天德、詔以兵據雲伽關、虜引去。
- (13) 天寶四年置。初、景龍二年、張仁愿于今東受降城置振武軍。天寶四年、節度使王忠嗣移于此城内。
- (14) 東南至河界靜邊軍一百二十里。
- (15) 神武軍城、在州北。「唐志」、「代州有守捉兵。其北有大同軍、本大武軍、調露二年曰神武軍、天授二年曰平狄軍、大足元年復更名。其西有天安軍、天寶十二載置。亦曰天寧軍」。
- (16) 以其年四月廿五日、權窆於朔州天寧軍城西北三里平原。禮也。
- (17) 雁門、上。有東陞關・西陞關。
- (18) 令河屯雁門關。
- (19) 「考異」曰……(中略)……按「實錄」、「五年二月壬戌、天德軍奏『沙州刺史張義潮・安景旻及部落使閻英達等、差使上表、請以沙州降』。……(後略)」
- (20) 一、回鶻猶在雲州、頗擾邊境。據二州蹤跡、必無深遠之謀。所慮、邊上奸人走投回鶻、爲其設計、令在雲・朔等州斷天德・振武驛路。……(後略)
- (21) 南走派ウイグルに関する主要な研究としては、山田一九六五／山田一九八六／Drompp 2002／Drompp 2005／村井二〇〇八などがあつた。
- (22) ただし、唐後半期に駅伝制は弛緩して施設の荒廢や駅馬の不足といった状況に陥っていた「青山一九六三、六七―七四頁」ため、本文書の駅がどの程度規定通り運用されていたか不明といわざるをえない。

- (23) 『新唐書』「地理志」に引用された賈耽の著述が「四夷述」(「四達記」とも)であることは榎「一九三六、一九八一―二〇〇頁」による。
- (24) 中受降城正北如東八十里、有呼延谷。谷南口有呼延柵、谷北口有歸唐柵、車道也。入回鶻使所經。
- (25) 陳沆遠「一九三三、八三頁」は、「四夷述」に記された道程は、全て駅道であると指摘している。
- (26) ウイグルと唐の絹馬交易については先行研究が膨大であるが、近年のものに齋藤一九九九があり、それ以前の先行研究が網羅的に紹介されている。また、ウイグル側から唐との外交を論じたものとして林一九九二がある。
- (27) 唐と周辺諸国との婚姻政策、いわゆる「和蕃公主」についての最新の研究として藤野二〇一二がある。唐とウイグルの関係に限定したものとしては、築山一九八三がある。
- (28) 八四二(會昌二)年二月作成「中島一九八三、表一(一)／『校箋』二三四頁、箋校(一)」の「條疏太原以北辺備事宜狀」(「一品集」卷十三、「校箋」二三三―二三五頁)には、雲州北方の把头烽への兵員の配備、中受降城の修繕と兵の増員、東受降城の旧城への移転が請願されており、南走派ウイグルの到来によって、弛緩した軍事拠点の再整備が急務となっていたことがわかる。
- (29) 今虜衆在陰山之北、山中盡有過路。若突出山南、使人二城、即天德・振武當時隔斷。
- (30) 「回紇路」とは、陰山からウイグルの中心地であった漠北の中央モンゴルを経由して、西南方の東部天山地域にあつた北庭(ヒシュバリク)まで抜けるルートのことであり、唐後半期に河西回廊を吐蕃に奪われ、からは盛んに利用された「長澤一九五六、二五三―二五九頁」。
- (31) この結論は、決して唐前半期の陰山南麓に駅道が整備されていなかったと主張するものではない。唐前半期の駅道に関しては今後の課題としたい。
- (32) 唐後半期の「軍」とは、唐前半期における臨時の遠征軍である「行

軍」ではなく、「行軍」が常駐化した「鎮軍」である〔菊池 一九六一、八四―八六頁〕。

- (33) 天徳軍に関する先行研究として、沿革や兵力の規模を論じたものに樊文礼 一九八七／黄利平 一九八九／穆渭生 二〇〇八、二六六一―七一頁／張郁 二〇一〇があり、地理比定を行ったものには張郁 一九八一／張郁 一九九七がある。より広く、唐後半期の藩鎮研究の一環として天徳軍を分類したものは張國剛 一九八三が、唐の北边防衛体制を論じる中で天徳軍に触れたものとして李鴻賓 二〇〇〇、二一七―二四五頁がある。また、唐後半期の北辺財政について論じた丸橋 二〇〇六でも天徳軍について論じる部分が多い。

- (34) 貞観二十一年、於今西受降城東北四十里置燕然都護、以瀚海等六都督・皐蘭等七州並隸焉。

- (35) 燕然都護府の管轄地域は漠南にとどまるものではなく、はるか西方の天山山脈周辺の遊牧民であるカルルクにまで及んでいた〔榮新江 二〇〇七B、三九―四〇頁〕。当然、漠北も管轄地域に入っていたと考えられる。

- (36) 乃詔磧南鵬鵠泉之陽、置過郵六十八所

- (37) 西田祐子氏によれば、『新唐書』「回鶻伝」前半部の記述はほとんどすべてに対応記事があり、歴史学的考察の根拠にはならないとされる〔西田 二〇一〇、一三五頁〕。本文で引いた『新唐書』「回鶻伝」の記事も『冊府元龜』卷一七〇「帝王部 来遠」（明版、二〇五一―二〇五二頁）のもととなった実録に基づいているという〔西田 二〇一〇、一五一―二〇二頁〕。傾聴すべき意見であるが、『冊府元龜』の記事にはなぜか「鵬鵠泉」が南端であったという記述がなく、これは『新唐書』の独自情報である。情報元は不明であるが、歴史的状況から考えてこの記事は信憑性があると判断したため、史料として利用する。

- (38) 十五年、小殺使其大臣梅録啜來朝、獻名馬三十匹。時吐蕃與突厥小殺書、將計議同時入寇。小殺并獻其書、帝嘉其誠、引梅録啜宴於紫宸殿、厚加賞賚。仍許於朔方軍西受降城爲互市之所、每年齎繒帛數十萬

匹就邊以遺之。

- (39) この突厥の行動は、突厥が唐との交易重視策をとるようになった現れであるとされている〔林 一九八五、一二五―一二六頁〕

- (40) 至會昌初、北虜喪滅、黠戛斯歸順於朝。武宗皇帝欲比周・漢、冠帶犬戎、切緣蕃情難防、須得辨捷長才、往宣 密命。公乃銜皇王之意、往天徳招諭。

- (41) 又太和公主下嫁、伏恐聖慮念其道遠。臣今具録天徳城已北到回鶻帳已來食宿・井泉、附於圖經之内。

- (42) 荒川氏以外の「館」についての先行研究としては、大庭 一九五九／大津 一九九三／青山 一九六三／魯才全 一九八四／孫曉林 一九九一／李錦繡 一九九五、九八三―一〇〇七頁などがある。

- (43) 自至徳後、藩鎮擅地務自安、郭成・斥候益謹、不生事于邊。奚・契丹亦鮮入寇、歲選酋豪數十入長安朝會、每引見賜與有秩、其下率數百皆駐館幽州。

- (44) 是歳、北虜遣梅祿將軍李暢以馬萬匹來市、託云入貢。所經州府守帥假之禮分、嚴其兵備。留館則戒卒於外、懼其襲奪。太原故事出兵迎之、暢及界上、公綽使牙將祖孝恭單馬勞問、待以修好之意。

- (45) 仮に天徳軍まで主要駅道が延びているとすると、天徳軍に駅ではなく館が設置されているのは奇妙である。『旧唐書』「柳公綽伝」でも、ウイグル使節は前節で検討したように駅が置かれる駅道とみなせる「太原路」を通過しているにもかかわらず、通過した先の州府で館に宿泊している。荒川氏の述べる通り、駅道は駅が置かれるものと館が置かれるものに二分されるとすればこれは矛盾である。今後は、駅道に置かれる館に加えて、州府に置かれる館の機能を検討する必要があるだろう。「北館文書」に現れる西州城内の「北館」の事例も「孫曉林 一九九一、二五二頁」、唐前半期のことではあるが、参考になる。

- (46) 沙陀の勃興については西村 二〇一〇とそこに引用される先行研究を参照のこと。



参考文献（再録がある場合は、本文での引用も含め再録の頁のみを提示）

・版本

『旧唐書』／『新唐書』／『遼史』／『元和郡県図志』／『通典』／『資治通鑑』  
／『読史方輿紀要』 中華書局標点本。

『旧五代史』 陳 尚君（輯纂） 二〇〇五 『旧五代史新輯会証』 上海、復旦大学出版社。

『冊府元龜』（明版・宋版（『宋本冊府元龜』） 中華書局影印本。  
『唐会要』 上海古籍出版社標点本。

『元氏長慶集』 冀 勤（點校） 一九八二 『元稹集』 北京、中華書局。  
略称

『校箋』 傅 璇琮／周 建国（校箋） 二〇〇〇 『李德裕文集校箋』 石家莊、河北教育出版社。

『隋唐五代』 張 希舜（主編） 一九九一 『隋唐五代墓誌匯編 山西卷』 天津、天津古籍出版社。

『西安碑林』 西安碑林博物館（編著） 二〇〇七 『西安碑林博物館新藏墓誌彙編』 北京、線裝書局。

『敦煌秘笈』 吉川 忠夫（編） 二〇〇九 『敦煌秘笈』（影片冊二） 大阪、財団法人武田科学振興財団。

『文物地図』 国家文物局（主編） 二〇〇三 『中国文物地図集 内蒙古自治区分冊』（上下冊） 西安、西安地圖出版社。

・和文  
青山定雄 一九六三 『唐代の駅と郵及び進奏院』 同氏 『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』 東京、吉川弘文館、五一―一二六頁。

荒川正晴 二〇一〇 『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』 名古屋、名古屋大学出版会。

岩佐精一郎 一九三六 『突厥の復興に就いて』 和田清（編） 『岩佐精一郎遺稿』 東京、岩佐傳一発行、七七―一六七頁。

石見清裕 一九九六 『交雜の禁止―唐代朝貢使節の入京途上規定―』 『アジア史における制度と社会―アジア史研究第二〇号―』 東京、刀

水書房。（再録 石見 一九九八、三三七―三五五頁）

― 一九九八 『唐の北方問題と国際秩序』（汲古叢書一四） 東京、汲古書院。

― 一九九九 『ラティモアの辺境論と漢ノ唐間中国北辺』 唐代史研究会（編） 『唐代史研究会報告第Ⅷ集 東アジアにおける国家と地域』 東京、刀水書房、二七八―二九九頁。

― 二〇〇八 『唐とテュルク人・ソグド人―民族の移動・移住より見た東アジア史―』 『東アジア世界史研究センター年報』 一、六七―八一頁。

― 二〇一〇 『唐の成立と内陸アジア』 『歴史評論』 七二〇、四―一六頁。

岩本篤志 二〇一〇 『杏雨書屋藏「敦煌秘笈」概観―その構成と研究史―』 『西北出土文献研究』 八、五五―八二頁。

― 二〇一三 『敦煌秘笈所見印記小考―寺印・官印・藏印―』 『内陸アジア言語の研究』 二八、二九―一七〇頁。

榎 一雄 一九三六 『賈耽の地理書と道里記の称とに就いて』 『歴史学研究』 六一七。（再録 『中国史』（榎 一雄著作集七） 東京、汲古書院、一九九四、一九二―二〇二頁）。

大津 透 一九九三 『唐日律令地方財政管見―館駅・駅伝制を手がかりに―』 笹山晴生先生還暦記念会（編） 『日本律令制論集 上巻』 東京、吉川弘文館。（再録 『日唐律令制財政構造』 東京、岩波書店、二〇〇六、一一五―一五八頁）

大庭 脩 一九五九 『吐魯番出土北館文書―中国駅伝制度史上の一資料―』 『西域文化研究会（編） 『西域文化研究第二―敦煌吐魯番社会経済資料（上）―』 京都、法藏館、三六七―三八〇頁。

落合俊典 二〇〇一 『羽田亨稿『敦煌秘笈目録』簡介』 郝春文（編） 『敦煌文献論集―紀念敦煌藏經洞発見一百周年国際學術研討会論文集』 沈陽、遼寧人民出版社、九一―一〇一頁。

― 二〇〇四 『敦煌秘笈目録（第四四三号至第六七〇号）略考』 『敦煌

- 吐魯番研究』七、一七四—一七八頁。
- 小野勝年 一九六四A『入唐求法巡礼行記の研究 第一卷』東京、財団法人鈴木美術財団。
- 一九六四B『入唐求法巡礼行記の研究 第二卷』東京、財団法人鈴木美術財団。
- 菊池英夫 一九六一「節度使制確立以前における「軍」制度の展開」『東洋学報』四四—二、五四—八八頁。
- 栗原益男 一九八八『五代宋初藩鎮年表』東京、東京堂出版。
- 齊藤茂雄 二〇〇九「唐代単于都護府考—その所在地と成立背景について—」『東方学』一一八、一二—三九頁。
- 齋藤 勝 一九九九「唐・回鶻絹馬交易再考」『史学雑誌』一〇八一—〇、三三一—五八頁。
- 鈴木宏節 二〇一一「唐代漠南における突厥可汗国の復興と展開」『東洋史研究』七〇—一、三五—六六頁。
- 二〇一三「内モンゴル自治区発現の突厥文字銘文と陰山山脈の遊牧中原」『内陸アジア言語の研究』二八、六七—一〇〇頁。
- 鈴木宏節・齊藤茂雄 二〇一〇「現地情報(三) 内蒙古編 調査報告」『遼金西夏史研究会News Letter』三、二五—三五頁。
- 妹尾達彦 二〇〇九「北京の小さな橋—街角のグローバル・ヒストリー—」関根 康正(編)『ストリートの人類学(下)』(国立民族学博物館調査報告八二)吹田、人間文化研究機構国立民族学博物館、九五—一八三頁。
- 高田時雄 一九九三「書評：池田温編『敦煌漢文文獻』(講座敦煌)第五卷」『東洋史研究』五二—一、一一八—一二七頁。
- 二〇〇四「明治四十三年(一九一〇) 京都文科大学清国派遣員北京訪書始末」『敦煌吐魯番研究』七、一二—二七頁。
- 二〇〇六「清野謙次蒐集敦煌写経の行方」『漢字と文化』九、九—一頁。
- 二〇〇七「李滂と白堅—李盛鐸旧藏敦煌写本日本流入の背景—」
- 『敦煌写本研究年報』一、一—二六頁。
- 二〇一一「李盛鐸旧藏写本「駉程記」初探」『敦煌写本研究年報』五、一—三頁。
- 築山治三郎 一九八三「唐の和蕃公主—廻紇を中心として」磯辺武雄(編)『多賀秋五郎博士古希記念論文集 アジアの教育と社会』東京、不味堂出版、五〇—六一頁。
- 内藤みどり 一九八八『西突厥史の研究』東京、早稲田大学出版部。
- 長澤和俊 一九五六「吐蕃の河西進出と東西交通」『史観』四七。(再録『シルク・ロード史研究』東京、国書刊行会、一九七九、二四五—二六六頁)
- 中島琢美 一九八三「南走派ウイグル史の研究」『史遊』一一、一九—三三頁。
- 西田祐子 二〇一一「新唐書 回鶻伝の再検討—唐前半期の鉄勒研究に向けて—」『内陸アジア言語の研究』二六、七五—一三九頁。
- 西村陽子 二〇一〇「九—一〇世紀の沙陀突厥の活動と唐王朝」『歴史評論』七二〇、六一—七五頁。
- 羽田 亨 一九五七「唐代回鶻史の研究」同氏『羽田博士史学論文集上巻 歴史編』(東洋史研究叢刊之三之二)京都、東洋史研究会、一五七—三二四頁。
- 林 俊雄 一九八五「略奪・農耕・交易から見た遊牧国家の発展—突厥の場合—」『東洋史研究』四四—一、一一〇—一三六頁。
- 一九九二「ウイグルの対唐政策」『創価大学人文論集』四、一一—一四三頁。
- 藤枝 晃 一九四一「沙州帰義軍節度使始末(一)」『東方学報』一一—三、五八—九八頁。
- 藤野月子 二〇一二「王昭君から文成公主へ—中国古代の国際結婚—」(九州大学人文学叢書二)福岡、財団法人九州大学出版会。
- 丸橋充拓 二〇〇六「唐代北辺財政の研究」東京、岩波書店。
- 村井恭子 二〇〇八「九世紀ウイグル可汗国崩壊時期における唐の北辺

政策』『東洋學報』九〇一、三三一六七頁。

護 雅夫 一九六七「突厥と隋・唐兩王朝」『古代トルコ民族史研究Ⅰ』東京、山川出版社、一六一―二二三頁。(初出「隋・唐とチユルク国家―隋・唐「世界帝国」の性格究明によせて―」石母田 正、他(編)『古代史講座二〇 世界帝国の諸問題』東京、学生社、一九六四)

森安孝夫 二〇〇七「シルクロードと唐帝国」(興亡の世界史 第六〇五卷)東京、講談社。

森安孝夫(編) 二〇一「ソグドからウイグルへ―シルクロード東部の民族と文化の交流―」東京、汲古書院。

山口瑞鳳 一九八〇「吐蕃支配時代」榎 一雄(編)『敦煌の歴史』(講座敦煌二)東京、大東出版社、一九七―二二三頁。

山田信夫 一九六五「遊牧ウイグル国の滅亡」『古代史講座一』学生社、東京。(再録『北アジア遊牧民族史研究』東京、東京大学出版会、一九八九、一二九―一五五頁)

—— 一九八六「九世紀ウイグル亡命者集団の崩壊」『史窓』四二。(再録『北アジア遊牧民族史研究』東京、東京大学出版会、一九八九、一五七―一八八頁)

吉田順一 一九八〇「ハンガイと陰山」『史観』二〇二、四八一―六一頁。

・中文  
岑 仲勉 一九三七「李德裕へ会昌伐叛集」編証上『史学專刊』二一。(再録『岑仲勉史学論文集』北京、中華書局、一九九〇)

—— 一九五八「突厥集史」(全二冊)北京、中華書局。

陳 凌 二〇一三「突厥汗国与欧亚文化交流的考古学研究」上海、上海古籍出版社。

陳 沅遠 一九三三「唐代駅制考」『史学年報』一一五、六一―九二頁。  
村井恭子 二〇一〇「唐宣宗時期的西北辺境政策試析」『唐研究』一六、二七九―三〇四頁。

樊 文礼 一九八七「略論唐代的豊州」『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』一九八七二、一八一―二五頁。

—— 一九九三「遼代的豊州・天德軍和西南面討司」『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』一九九三三、七二―七七頁。

黄 利平 一九八九「唐天德鎮領三受降城說質疑」『中国歴史地理論叢』一九八九一、一三三―一三〇頁。

李 鴻賓 一九九五「唐朝三受降城与北部防務問題」『長城國際學術研討會論文集』長春、吉林人民出版社。(再録『隋唐五代諸問題研究』北京、中央民族大学出版社、二〇〇六、一〇一―一二九頁)

—— 二〇〇〇「唐朝朔方軍研究―兼論唐廷与西北諸族的關係及其演變」長春、吉林人民出版社。

李 錦繡 一九九五「唐代財政史稿(上卷) 第三分冊」北京、北京大学出版社。

李 軍 二〇一〇「唐大中二年沙州遣使中原路線獻疑」『中国辺疆史地研究』二〇一、一〇〇―一〇五頁。

李 逸友 一九九三「内蒙古歴史名城」呼和浩特、内蒙古人民出版社。

劉 幻真 一九九四「唐弘雲祠地望考辨」『内蒙古文物考古文集』北京、中国大百科全書出版社、四四三―四四五頁。

魯 才全 一九八四「唐代的馭家館試積」『魏晉南北朝隋唐史資料』六、三四―三八、三三頁。

穆 渭生 二〇〇八「唐代関内道軍事地理研究」西安、陝西人民出版社。

榮 新江 一九九七「李盛鐸寫卷的真与偽」『敦煌學輯刊』一九九七二。(再録『辨偽与存真―敦煌學論集』上海、上海古籍出版社、二〇一〇、四七―七三頁)

—— 二〇〇七A「追尋最後的宝藏―李盛鐸旧藏敦煌文獻調查記」劉進宝・高田時雄(編)『転型的敦煌学』上海、上海古籍出版社、一五―三三頁。

—— 二〇〇七B「新出吐魯番文書所見唐龍朔年間哥邏祿部落破散問題」沈 衛榮(主編)『西域歴史語言研究集刊 第一輯』北京、科学出版社、二一―四三頁。(和訳 榮 新江/西村陽子(訳) 二〇〇八「新出吐魯番文書に見える唐龍朔年間の哥邏祿部落破散問題」『内陸アジア

## 言語の研究」二三、一五一―一八五頁)

- 史念海 一九八五「陝西省在我国历史上的战略地位」『文史集刊』一。  
 (再録『河山集 四集』西安、陝西師範大学出版社、一九九一、一一七  
 四頁)
- 孫曉林 一九九一「關於唐前期西州設館的考察」『魏晉南北朝隋唐  
 史資料』一一、二五一―二六二頁。
- 孫瑜 二〇一二「唐代代北軍人群体研究」北京、社会科学文献出版社。  
 王北辰 一九八九「内蒙古後套平原的幾箇歷史地理問題—兼考唐西受  
 降城」『内蒙古社会科学』一九八九―五。(再録『王北辰西北歷史地理  
 論文集』北京、学苑出版社、二〇〇〇、三五八―三七〇頁)
- 王亞勇 一九八八「三受降城修築時間考」『内蒙古師大學報』一九八八  
 一三、五〇―五二頁。
- 嚴耕望 一九八五A「唐代交通圖考(一)」(中央研究院歷史語言研究  
 所專刊之八十三)台北、中央研究院歷史語言研究所。  
 —— 一九八五B「唐代交通圖考(二)」(中央研究院歷史語言研究所專  
 刊之八十三)台北、中央研究院歷史語言研究所。  
 —— 一九八六「唐代交通圖考(五)」(中央研究院歷史語言研究所專刊  
 之八十三)台北、中央研究院歷史語言研究所。
- 楊蕤 二〇〇三「歷史上的夏遼疆界考」『内蒙古社会科学(漢文版)』  
 二四一六、二八一―三一頁。
- 張虎 二〇一一「唐代西受降城・天德軍的置廢和建制沿革考述」『陰山  
 學刊』二四一三、八三一―八六頁。
- 張國剛 一九八三「唐代藩鎮類型及動亂特点」『歷史研究』一九八三―  
 四。(再録「唐代藩鎮的類型分析」『唐代藩鎮研究(增訂版)』北京、中  
 國人民大学出版社、二〇一〇、四二―五九頁。
- 張郁 一九八一「唐王逆修墓誌銘考釈」『内蒙古文物考古』一、六七―  
 七二頁。
- 一九九一「中受降城址初探」『包頭文物資料』二。(再録 張海斌  
 (主編)『包頭文物考古文集』(上下冊)呼和浩特、内蒙古大学出版社、  
 二〇〇九、五五〇―五五三頁)
- 一九九七「唐王逆修墓發掘紀要」『内蒙古文物考古研究所(編)『内  
 蒙古文物考古文集』北京、中国大百科全书出版社、五〇二―五一八頁。  
 趙占魁 一九九三「内蒙古後套平原古城考—兼与王北辰先生商榷」  
 『内蒙古社会科学(文史哲版)』一九九三―四、五九―六五頁。
- 趙貞 二〇〇一「敦煌文書中所見晚唐五代宋初的靈州道」『中国歴史地  
 理論叢』一六―四、八二―九一頁。
- 二〇〇二「大中二年(八四八)沙州遣使中原路線蠡測」『中国辺疆  
 史地研究』二〇〇二―三、八九―九二頁。
- 二〇一〇「帰義軍時期靈州道研究(上)」『帰義軍史事考論』北京、  
 北京師範大学出版社、一四〇―一七五頁。
- ・ 欧文
- Drompp, M. 2002: The Uighur-Chinese Conflict of 840-848. In: Di  
 Cosmo, N. (ed.), *Warfare in Inner Asian History (500-1800)*  
 (Handbook of Oriental Studies VIII-6), Leiden/Boston/Köln, pp.73-  
 103.
- 2005: *Tang China and the Collapse of the Uighur Empire: A  
 Documentary History*. Leiden/Boston.
- Iwami, K. 2008: 'Turks and Sogdians in China during the T'ang  
 Period. *Acta Asiatica* 94, pp.41-65.
- 【付記】本稿脱稿後、陳国燦氏の「読《杏雨書屋藏敦煌秘笈》社会文書札記  
 (一)」(『魏晉南北朝隋唐史資料』二八、二〇二、二四九―二六二頁)を  
 得た。その中の二五五―二五九頁で、本稿で扱った羽〇三二文書に検討を  
 加えている。陳氏も本文書の作成年代を八四八(大中二年)から八六一(咸  
 通二年)の間に置いており、本稿の結論とほぼ同じである。なお、陳氏は  
 エチナから回鶻路を通ってきた使節団がわざわざ天德軍に到来した理由を  
 不明としている。「二五八頁」が、天德軍が唐の北の外交窓口であったこと  
 は本稿で論じた通りである。

# *Yin-shan* 陰山 Mountains and *Tiande-jun* 天德軍 in the Late Tang Period:

On the basis of 羽032 Document from Dunhuang.

SAITO Shigeo

This paper discusses the conditions pertaining in the vicinity of the Yinshan mountain range during the late Tang period through an examination of 羽032, a document discovered at Dunhuang. It begins by establishing that this document is a record kept by an emissary from *Shazhou* 沙州 (present-day Dunhuang) who in the early 850s reached the *Yinshan* Mountains, evidence for which is the fact the place names appearing in the document conform to late Tang usage and what is known of the political situation surrounding Dunhuang during this period of time. From it, this paper points to the fact that in the 850s a post road ran east-west along the southern foothills of the Yinshan Mountains, and that this post road was established primarily for the use of Uighur emissaries traveling back and forth to the Tang court from their homeland in the Mongolian Plateau.

The paper further demonstrates that *Tiande-jun* was a place where emissaries from the north would be sure to visit as it was located in the western Yinshan region where travelers from the Mongolian plateau would arrive, and that because of this facilities called *guan* 館 for welcoming the official emissaries were established at this site.